

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）  
昭和二十四年四月二十八日逓信省特別授承認第三五二號  
昭和二十八年八月廿五日印刷 昭和二十八年九月一日發行

第十九卷

九月號

淨

土



造久

九月號

## 戦犯歸來に寄せて

私の愛誦する句に俳人正岡子規の病牀六尺の中の

「余は今迄禪宗の所謂悟りという事を誤認していた。悟りという事は如何なる場合にも、平氣で死ぬる事かと思つて居たのは間違いで、悟りという事は如何なる場合にも、平氣で生きて居る事であつた」

というのがある。子規のように死を目前に控えて、これと眞劍に取りくんだ人間にして、始めて言い得ることであり悟り得ることである。

國民的待望の中に多數の戦犯が祖國の土を再度踏まれたことは、何としても近來にない大きな喜びである。そして私共にとつて特に感銘あることは、當然豫定されていた死を免れ得た人々の心境である。これは文字に書けば「無上の喜び」としか表現出来ぬが、その裏に含まれている意味は實に底知れず深い。死ぬことの難しさを越えて刑場に散つた方の靈は、これをお養するしかない。が、死は一度限りの決斷である。だがそれを通して、今回獲得された「生」の難しさこそ、喜びにもまして大切なものを含んでいる。折角「平氣で生きて」來たその境地を、先長き世俗に、孤言の純粹さを失わざらんことを切に祈ると共に、私共もともどもそれを守ることに協力せねばならない。(竹中)

## 浄土 九月號 目次

初秋の感謝……………吉田絃二郎(1)

正しい信仰と母……………三枝樹正道(12)

尼僧の姿……………寺森教山(16)

授戒に参加して……………堀尾千枝子(15)

彼岸に思う……………戸松学瑛(8)

信 仰……………中野尅子(24)

私もみほとけ……………柴田玄鳳(20)

沖縄の宗教と袋申上人……………内山憲尙(28)

秘められたる苦心……………編輯部(30)

現代の短歌……………(18) 浄土俳壇……………(29)

浄土編輯のつどい……………(11) 光 音……………(27)

十 善 法 語……………眞野正順(4)

浄土保育のページ……………(10)

# 初秋の感謝

吉田 絃二郎



このころは武蔵野の丘の上にも、雑木林の小蔭にも、陸稻畑の片隅にも新らしい家が建てられてゆく。八九坪の家に、防水布のやうな屋根を葺きながらも、獨立の住まひを持ち得たよろこびに浸されてゐる人たちを見れば、わたくし自身めぐまれたやうな、微笑ましい氣持にもなる。

そのやうな小ひさな家に住む人たちは恐ろしい戦火に焼け出されたのであらう。が、武蔵野の眞ん中にぽつんと見出される家の周圍には例外なしに美しい花苑を持つてゐる。つい、こないだまで、ちあふひやマーガレットや菖蒲やガーベラやダリアの花がそれ等の家を飾つてゐたが、いつの間にかコスモスや萩や菊の花が咲きはじめた。

そこに住んでゐる人たちのさびしさや不自由さを慰めるためにそれらの花は妍を競うて咲いてゐる。あたかも恐ろしい戦禍を忘れたかのやうに。

今日もわたくしは武藏野を歩いてゐて、途中から雨に降られた。雨に濡れて歩いてゐると、畑の中の新しい家のなかから、見知らぬ中年の女が走つて来て傘を貸してくれた。わたくしはこれまで武藏野を歩いてゐて、見知らぬ人たちから幾度雨傘を貸してもらつたことであらう。

おそらくそこに住んでゐる人たちは、雨の日も雪の日も風の日も、夕方の武藏野を踏躑として歩むわたくしの姿をながめてゐるのであらう。だからわたくしのあはれな老残の姿は、あの人たちにとつては未知の人間ではないのであらう。

わたくしも、そこに住む人たちの顔を知らないが、それらの家から出て来る人に聲をかけられると未知の人のやうな感じはしない。

そこの小徑に遊んでゐる子供たちもわたくしの顔を見ては「小父さん、何處へゆくのか?」といひ、「おじいさ

ん足が痛むのか?」などと問ふ。

武藏野は不思議な世界である。黙々として武藏野は語らない。が、しかしそこに住む人と人との間には温い人間の心が通つてゐる。

近くの麥畑に千九百萬圓といふ巨額な金で外國人の家が建てられた。三家族で住んでゐるといふことである。時々家の者が外國人の生活振りを、外から見て來ては聞かせてくれる。

それほどの家に住む人であれば、高級な自動車を持ち相當な生活をしてゐるにちがひないが、

「子供たちはいつも跣足で庭に遊んでゐます。街に買ひ物についてゆく時も跣足で行きますよ。」「子供たちは時々兄妹喧嘩をしてゐますが、お母さんがやつて來るとぴたりと喧嘩をやめます。お母さんは誰れが善いか、惡いかを裁いて、靜かな聲でいひきかせてをります」など

と家の者は話してくれた。

去年の秋のころから直ぐ近くの丘の上に八千坪の地を擁して聖フランシスコ派の教會堂が建築中である。そこ  
の傳道師たちは如才がなく、町の子供たちに逢つても、  
大人に會つてもにこにこ笑つて、片言まじりの日本語で  
愛想を言ふ。

昨今は高い鐵柱を組み立て、砂利を運んでコンクリー  
トを堅める作業をつゞけてゐるが、

「教會の傳道師さんたちも破れ服を着て、ばくばくの  
靴を穿いて、にこにこしながら材料を運んで働いてゐま  
すよ」と、家の者はわたくしに話してくれた。

愚案するに冥途もかくや秋の暮（芭蕉）

秋になる毎に想ひ出さるゝ句である。寂然たる秋の深  
さはわたくしたちの心をおのづから悠久の世界に誘ふ。

わたくしは日本の秋に生きる幸福を感謝しないではな

られない。

百日紅が咲き、道ばたや小川のほとりに甘草や曼珠沙  
華の花が咲くやうになれば、武藏野の小徑を傳うて寺か  
ら寺へと遍路の群がつゞく。一年の内、たとい幾日かで  
も、世間的なわづらひから遁れて、ひたすらに佛の國を  
思ひ、冥途を想ふことはありがたいことである。しみじ  
みと冥途を案ずるといふことはしみじみと現世の深さと  
よさとなつかしさを知ることである。平常はあわたゞし  
い生活に追はれて靜心もないわたくしたちではあるが、  
秋の空をながれ、秋の雲を見、秋の大氣につゝまるれば  
遍路の敬虔なこゝろにつながるものを見出す。

秋になれば鐘の音も一しほ幽玄な世界のひゞきを傳へ  
て來る。無心に聽く鐘の音にもかすかなさとるを感じる  
わたくしは朝露を踏んで知恩院の山門の前に佇み、か  
すかにひゞいて來る木魚の音を聽き、京都の秋を訪ねた  
よろこびに幾度か胸打たれたことがあつた。

慈雲尊者の

# 十善法語 (三)

眞野正順



さて今日は最後でありますので、もう十善の一つくに入つて行く事は出来ません。

その一つの例として、中の一つ、男女の戒め、不邪淫戒を取上げて御紹介する事に致しましょう。——少し尊者の文章を読んで見ます。

『この法性の天地となり来る。天に天象あつて、この日月あり。この星辰あり。この虹蜺あり。この春夏あり、この秋冬ある。地に地理分れて、山川あり、河海あり。土に肥瘠あり。國に華夷ある。その中、人物に種々差別

のある。面白きことじや。この楽しみ世界海と共に盡くる事はない。法性が男女と成り來り、この男子あつて天の徳を全くする。この女子あつて地の徳を全くする。陰陽これに配して萬物生ずる。閨門の中は、人知らぬ處なれども、男女の道が正しければ、天地の氣候も自ら正しく、男女の道が亂るれば、天地の氣候も自ら亂る。喩へて云はゞ、かゝり人形の糸を索くが如く、面白きことぢや。自心が法性と相應すれば、この世間眼を豁開して此のからくり人形を看る。面白きことじや。この楽しみ

衆生界と共に盡くる事なきじや』

人間は絶えず宇宙の本質を展開してゆきます。そこに盡くる事のない喜びがある。尊者はこの喜びを讃美し、むしろ酔へる者の如くであります。そこには何一つとして捨つるものはない。人に具はるもの一として法の現はれで無いものはないからです。それを缺いて、眞實の生活が出来る筈ない。男子ならば、男子の根、具はらざれば、天の徳を全うする事は出来ない。女子ならば、女子の根、具はらざれば地の徳を全うする事は出来ない。佛の道とても、またそれ以外にあるのではない。

律をよむと、昔、一人の愚かな僧がありました。女人を慕ふ情が斷ち切れないので、遂に自ら刀を執つて其根を斷つた。同輩が驚いてこれを佛に告げますと、佛はこれを聽いて「一部分傷けたのなら懺悔せしめよ。全部失つたのならば、直ちに、その僧を追放せよ。根具らざる者は人間の師となる事は出来ぬ」と云はれたと傳へられています。眞に人の道を遂げるためには、人に具はる一

切を生かさねばならぬ。總てをその正しき意味に生かして行かねばならぬ。これを故意に切り捨て、道を全うする事は出来ません。自らその身を不具にし、その欲望に關係なき身になつて、眞實に人の道を示す事は出来ません。不具者の心になるからです。出家が男女の道を避けるといふのは、決してそれが罪惡だからではない。たゞ正しく夫れを導く爲に、慾を超えたる立場を持たねばならぬからであります。

『今時、外典を學ぶ者、佛法の廣大なるを知らず。知らぬ故そしる。佛法と云ふは、自からその身を潔くせんと欲して大倫を亂る類と。』

これ等は鹿相なることじや。たま／＼法の尊尙なるを信する者も、刈萱道心、西行法師が風を見て、君臣父子夫婦をも棄て、山林幽谷に入らざれば、佛法内の人に非ずと思ふ。こらは取違へたる事じや。かの類は、佛法の中に在つて、憒闇を避け名聞を厭ふ一端と云ふべきじや。この一端の法を以て法を窺ふは非じや。この法は廣大に

して一切を残さぬ。在家は在家の道あるじや。出家は出家の道あるじや。大心の衆生は大心の道あるじや。小心の衆生は小心の道あるじや。』

それならば、なぜ僧は獨身であるのか。

『眞正の沙門の不婬戒を護持するは、諸佛正法のある處じや。五欲の中には觸欲最も重く、情欲の中には愛著最も深しとある。この婬欲の法、身心を繫縛して累劫の愛患となる。この身心、愛欲に隨順すれば、此の世界ことごとく執著となる。流れて我慢となり、或は鬭諍を起す。……僧の天地の間にあつて人倫を超過する。人倫を超過する者が人倫の師となる。其の道かくの如くじや。』

人の本能を否定しようと云ふのではない。本能を超えて、夫れに囚はれざる者のみが、よく之を指導し得る。

出家はそれであります。

然し、かゝる道は、人倫においてむしろ例外とせねばなりません。人倫の道は、あくまで人間の欲望の中にあつて、その秩序に於て、本性を遂げゆく事にあります。

然し、こゝに留意せねばならぬ事は、かくの如く、欲望を追ふてゆく内、人は必らず狭く、その人に囚はれて行く事であります。

強き愛欲に索かれて、我欲の中、ひしと凝り固まつてゆく。これが、いつも人生の惱みて争ひの種となるのであります。

されば、人倫を眞に正しく遂げる爲には、かゝる強き欲望の中にあつて、どこか夫れを超ゆる心が用意される事が必要です。人は、何事を爲すにつけても、何時も、それから離れた心を持つ事が大切だと云はれます。爲しつゝ、その心の底の何處かに、すゞしい風が吹き過ぎてゆく。内に囚はれざる心を持つが故に、その事に於て却つて自在を得る。超えつゝ夫れを見極める心。靜かに事の始終を見通すこゝろ。人生を行じて謬り無きためにはこの様な超えたる心の清澄が用意されねばなりません。その意味に於て、人はまた彼の出家の心の一分を用意する事が必要でありましょう。要は、その形ではない。そ

の心に於て、一切空の心構えが必要なのであります。

ものは全て過ぎて行く。止まるものは一つとても無い。かゝる過ぎゆくものゝ中にあつて、決して夫れに囚はれてはならない。過ぎゆく全ては、その人にとつて尊い機會であります。わが眞實を發するための機會であります。この機會を通じて、我が裡なる眞實を現はし、宇宙の眞諦に參じて行く。それを掴まねばならぬ。決してこれに執着し、これに囚はれていてはならぬ。

### 掲 示 板

あたゝかい  
すなおな心が  
あなたの生活を  
幸福にする。  
幸福は  
あなたの心の中にある。

花びらは散つても  
花は散らない  
形は滅びても  
人は死なない

——金子大榮——

然し、そのためには、我心は常に「空」によつて裏附けられていねばなりません。一切は「空」の心の上に於てこそ、初めてその自在を得る事ができるのです。

『鳥の籠を脱して虚空を飛ぶが如く、魚の網を透して大海に遊ぶが如く、この色心の巢窟を脱して迥然として獨り脱する。面白きことじや。迥然として獨り脱すると云ふも、天の天外に飛去る事ではない。地の地外に没し去ることではない。獨善逸居して世に異なることではない。』

一切の中に於て自在を得ることである。この心を持つに依て、眞に人生の目的を遂げる事が出来ます。この心はやがて、一切のものをことごとく我れに於て見るころ、一切の中に共に生きる心となつて行きます。あらゆる一切に我を擴げ、全てを我ものとして見る心となつて行きます。かゝる廣き心の世界に出るのでなければ、人は決して天地の本性に參じて、我が眞實を遂げる事は出来ません。



# 彼岸に思う

戸松學瑛

## 一、假りの極樂——出張所

焼きつくような夏の晝下り、近所の道路工事に従事している東京都安定所の日傭人夫達が三々五々きまつて、寺の門の下や、境内の木影に休んだり晝寝したり、遠慮勝ちにねころがつている。

「どうですか、涼しいでしょう、風は吹き通すし、日影はあるし」と聲をかけて見た。「すみません、全く氣持ちのよいのを通り越して夢うつつです」又他のひとり「不思議なくらい、いい氣持ちになります、皆がそう言っています、これは持ち合せの邪氣がスッ飛んでしまうからでしょう」と世辭拔きの挨拶であつた。邪氣がなくなる、本當にそうでしょう。お寺は清淨なる處、靈地、靈場であるからでありましょう。

あの寺も、この寺も皆創立以來今日まで幾百千の善男善女が敬虔な祈り心を以て出入した處、お堂から流れ出る讀經、念佛の聲々は恐らく境内の尺地寸土にも沁み込んで居るにちがいない、こ

れを土徳とでも申しましょうか。この土徳があればこそ、こゝがそのまゝ立派な靈地、靈場であつて、靈場必ずしも比叡、高野をもちいない。清淨な土徳の在るところ、これこそ天下の靈地、靈場であつて差支ない。謂はばこゝが、そのまゝ極樂淨土の出張所となるわけであります。極樂の出張所であればこそお利益もあるわけ。成程人夫諸君の言う邪氣も消えて涼しい身の上となるのは當然でありましょう。

論より證據、お寺まいりの歸りほど、スガスガしい、心地のよいことにありませんとは常に耳にする言葉であります。信心も徳の餘りと言うもの、お寺そのものに徳を具えて居りますから不徳の者も自然とお寺へ來るとよい感應を受けることになるのではありますまいか。お百度を踏む、千度詣り、二千度詣りなど決して古典の昔物語、悩みある人だけの語り草と聞き捨てには出来ません。

かゝる靈地、清淨處に建てられたお寺。たとえそこには經説の

よるな宮殿樓閣、七重の欄楯、七重の羅網、七重の行樹……

七重伽らんのよそはいはなくとも、大は本山、小は草庵、各寺々の内陣、外陣、香華灯燭のたゞすまいまで極樂世界のそれになぞらえて造られて居る。御本尊さまは夙に開眼ましまして攝取のみ手をのべさせ給う眞佛の御姿と拜す、柴のいほりも極樂世界の莊嚴に外ならず、眞に西方極樂の出張所をこゝに拜すと申上げても差支ありません。

極樂の出張所——このお寺を更に縮小したもの之がお佛壇であります。お佛壇は我が家にとつての假りの極樂、出張所であります。お寺も有り難いが手近なお佛壇も一段と有りがたく尊い存在であります。いよ／＼秋の彼岸が來ました。津々浦々のお寺には善男善女の御參詣、家々のお佛壇には彼岸園子が飾られて供養の誠を捧げることでありましょう。

## 二、あこがれの極樂——西方極樂

假りの極樂、出張所に對する本家、本元とも言うべきあこがれの極樂、まだ見ぬ極樂は果して何處ぞと求めて止まぬ心情が、古來春秋二季の彼岸會の宗教行事として特に重んぜられて來たと申し上げたい。

今更ながら、彼岸とは波羅蜜多、譯して到彼岸、行きついた即ち生死輪廻の此の岸を離れて涅槃常樂の彼岸に到達する意であ

ります。唐の善導大師は東岸を娑婆の火宅、西岸を極樂の寶國に配し彼の名高い二河白道の譬えを説かれました。その彼岸即ち極樂の所在は春分秋分に日正東より出でて正西に没する處、十萬億の佛土を超過すと經に説き示されて居ります。

是より西方十萬億の佛土を過ぎて世界あり、名けて極樂と曰う  
(阿彌陀經)

こゝを去ること十萬億刹なり、其の世界を名けて安樂と曰う  
(大無量壽經)

十萬億刹は無量から見れば遠からずではありますが、常識からすれば先づ遠い所、その間には生死の大海も三途の河もありそうで道中は頗る難儀と察せられます。

そこで、この身、このまゝ悟つて見れば極樂世界、娑婆即寂光土と觀成就する聖者もありましょう。かゝる聖者にとつては、極樂は足下にあつて甚だ近い。居ながらの極樂とでも申しましょうか。

いずれにせよ、お釋迦さまからすれば對機說法の方便、信する衆生から見ればめい／＼今のこの身にびつたりと合うそれぞれ教で一代八萬四千の法門が聖道、淨土、自力、他力と判別され蘭菊各美を競うも道理あることであります。只その中にあつて淨土念佛の教は生死輪廻の凡夫が、本願念佛の一行に因つて直ちに彼岸、極樂に往生出來ることを目的とする他力の法門で、お釋迦さ

ま出世の御本懷——一切衆生救済の大慈悲に基いたものであります。口稱の念佛は修し易く行じ易く、而も阿彌陀如來の本願でありますから法然上人は選擇本願念佛集の開卷第一に、往生の業、念佛を先となすと仰せられ、愚かなる凡夫も本願の念佛によつて極樂往生が出来る、と淨土一宗をお開きになつた次第であります。極樂は遠くとも一念の頃に到達する必ずしも六度萬行の修行を要しない、と心得たい。學問も、りくつも、苦行もないのです。それらを一切ふりすて、本願をたのんで救われていく。

あの明治の先覺者、慶大の創始者、福澤諭吉先生も丙申の年（明治廿九年）信州善光寺に詣で、他力本願を知る前因ありの一詩を賦して本願に會つたことの喜びを歌われました。先生歿して幾春秋、亡きがらは常光寺の靈地に念佛の聲を喜びながら安らかに眠つて居ることでありましょう。かく極樂は遠くて而も近い。

清少納言は枕草紙に「遠くて近きもの

### 極樂

と言ひ放つております。彼女はこゝで極樂を「船の路」、「男女の中」と同一列に扱つては居りますが極樂へは一念にして刹那に到り得るとの信念を一流の機智で取扱つて居るものでせう。

けふ彼岸菩提の種子をまく日かな

芭蕉翁は、いみじくも申されました。蒔かぬ種子は生えぬ、菩提の種子、阿彌陀如來の本願念佛の種子は今が蒔き時のおひがんでありませんか。

（淨土宗、布教師）

## 淨土保育のページ

◎本月より、淨土宗關係の幼稚園、保育園、日曜學校等に關する記事、讀物を掲載することとなりました。淨土宗保育連盟、古屋氏も御協力を約されている。

◎八月十七日より三日間、御殿場の大乗寺に於て、淨土宗保育連盟の夏期總會及び講習會が開催された。講師は椎尾先生を初め、内山憲尙、同夫人、佐藤良智、松濤基、森爽、清水の諸先生。九州其他遠方より參加した人も多く、教諭保姆七十餘名、園長三十名。快晴に恵まれ大に成績を上げた。終了後、山中湖、富士登山に行く人もあつた。

◎總會では本連盟の會長は、渡邊眞海氏、理事長に内山憲尙氏が推され、今後について種々協議する所があつた。本欄の事も上程、賛成を得た。

◎十月には名古屋で中部部會が開催される。

◎同連盟では、本宗全體の保育機關と連絡をとり、實態調査報告と參加を要望しているが、まだ一七〇餘しか集つていない。未だの方は至急連絡をとられたいと。

◎本欄宛、各國のニュースをお送り下さい。

## 浄土編輯のつどい

七月末の一日、涼風通ふ一室で（鎌倉大佛）に、佐藤賢順、良智、密雄の各先生、清水から遠路出向の中村康隆先生、それに竹中、安居、眞野（龍）各編輯員出席、治子夫人のおもてなしをうけつゝ、その話題を二、三。



左より賢順・密雄

竹中 この間、中外では、浄土雜誌位もつと讀めと書いてありましたが、案外、こうしたよい雜誌のあるのを知らないのではないでせうかね。

中村 編輯の自信たつぶりだね。

龍海 東京が一番多く讀んでますね。その次

は北海道、福岡あたり。地方では、内容にもつと法然上人を

という聲もつよい。

安居 内容が一時、大分難しいと言う讀者の聲もありましたので、充分注意もし、

努力はしています。他面には、もつと面白いものを各方面の方々にと考へ訪問なども、どしどししたいと思つています。戦犯特輯は割に好評でした。「働く人と信仰」とか、よい特輯をねらつております。

密雄 所で「勞働と佛教」は僕に書けと云うんだらう。（笑）一つ思い切つた事を、思うまゝに書いてやらう。何でもかでも佛教の理論にあてはめる様な事大主義的説明は面白くないからね。

良智 そう言へば、僕は六時禮讃の解説だったね。少し私なりのものと考へているがね。

治子 俳壇の方はどうですか。晴子先生も、大變心やすく協力して下さつていたのですが。

安居 お蔭で、新しい空氣を注入してもらつてゐるわけですが、何分にも讀者の投稿の少ないのは残念で。

竹中 賢順先生の一枚起請文は大分好評でしたね。然し又何だか中外で盛んに反駁しているのもいましたね。

賢順 そうかね。私は一寸も知らなかつたが。

龍海 しかし、あれは、大分ピントはずれな評の様でした。もつとよく讀んで考へて欲しいと思いますね。

安居 同感ですね。唯、言葉の枝葉末節を取りあげての議論ですからね。而も論旨は首尾一貫してないですよ。

密雄 讀者との連絡も兼ねて、浄土の會を開くとよいがね。

龍海 是非考へてみたいと思います。東京では早々に一度如何でせう。京都では會員が少ないので、仲々困難でせうが、新保君も頑張つていてくれますから、その内に出来るのではないでせうか。

賢順 編輯面での企畫はどうです。

安居 少くも信仰雜誌としては、どれにも負けて居らぬと信じています。同人として更にN、H、Kの高瀬君や、同じく賣出し中のライター須藤出穂氏の協力も得る事になりましたので、ドラマ等も出て来て、讀者には喜んで頂けることとせう。

中村 それは面白いね。

竹中 まあ、大いに頑張ります。



左より竹中・眞野(龍)・安居



# 正しい信仰と母

三枝樹正道

西の方へ行かんとして東行きの電車に乗つたとしたら、恐らく人は笑ふだらう。然し世の中には案外こんな間違ひをしている人が多いのである。一生懸命に儲けようと念じつゝ損をすることばかりしている人もある。これらは早く利益を得んとして、反つて信用を無くして行く人の類である。又眠れないから本を読むと云ふ人もある。この人は眠るのが目的で、讀書は手段である。だから若し眠れたら本も讀まない人らしい。或は日曜日だと朝も早くから起きて遊びに行き、夕方おそく疲れ果てゝ歸宅、而して月曜日はぼんやりと暮す人もある。この人は平常よりも日曜が、仕事よりも遊びの方が大切だと思つてゐるらしい。尤も、楽しいことは遊びであり、苦しいことは仕事であると定めてゐる人がある。だから遊ぶことの爲に仕事をするのであつて、若し遊べないなら何を苦しんで仕事をするかと云ふ人もある。いかにも眞實らしく聞える言葉ではある。然し、こ

れらの人は、何が眞の楽しみか、何が眞の苦痛かを、研究もせず又反省もしない人である。唯だ自分勝手に獨り決めをして平然としてゐる人である。ほんとうにこれでよいのであらうか。

現在の多くの人が、この誤つた考へ方を、恰も正しい考へ方であるかのように思つて、當然のことゝ信じてゐるところに、現代の不幸と不安があり、救い難い危険があるのである。これを救ふには教育によるより他に途はない、而もその正しい教育は母親による宗教々育に俟たねばならぬと思ふ。

明治以來、西洋の文化が怒濤の如く入つて來たが、その多くが本能に基礎をおく、自己中心的のものであり、それが又利己的に受納せられて來た。曾ての佛教儒教の教へた東洋的な、社會中心的な利他的な考へ方は影を潜めてしまつて、社會は擧げて自己權力の擴張に苦心するに至つたのである。茲に「偉くなれ」の教育が行はれ、

他を押しつけても先きに行き、他を倒してよりも上にならうとする教育が行はれたのである。かくて生存競争弱肉強食の社會相を呈して來たのである。人生々活を楽しくする爲の文化の發達が反つて不幸を齎す結果となつた觀がある。

本能的な、ものゝ見方、これは根強いものではあるが、本能は總べて自己中心的なものであつて、社會生活を營む爲には、その儘では決して幸福を齎すものではない。ほんとうはこの自己を社會にまで擴大しなければ、眞の幸福は現れるものではない。本能的な小さい個人我を固執しては、いつまで経つても、眞の幸福は得られないものではない、そこには唯だ争闘のみが待つてゐる。現在は多數を利用し、集團を利用し、恰も多數者の利益の如く表面は見せてゐる活動が澤山あるが、靜かに考察すると悉く利己的な自己中心の盲動である。いかにも幸福を求めているかの如くに思い、又社會からも、かく思はれてゐる、多くの運動が、實際には社會を一層不安に個人を更に不幸に追込んでゐる現狀である。本末を轉倒し、輕重を誤つた考へ方が、この禍の原因である。この誤つた考へ方を訂正することが、最も大切なことであり、それが教育である。文教を輕んじて、いかに制度を整えても、それは益々自己の欲望を増大せしめるものであつて、不満と不幸は増大するばかりである。衣食足つて禮節を知ると云ふが、禮節の本來の相が何であるかも知らない者に

只だ満腹感を與へ、徒らに衣服を興へても、それは少しも幸福になるものではない。茲に本當の教育が必要になつて來るのである。而も現在に於ては眞に遺憾なことではあるが學校では本當の教育を行ふことは無理であり、不可能である。(このことに就ては今省略する)

然しこの儘見過しては、前述の例ではないが、恰も幸福を求めて西へ行かんとして不幸の東行電車に乗るようなものである。そこで私は家庭に於ける教育、殊に母親の教育に最も大きな信頼と希望を置くのである。現在學校教育で最も缺如してゐるものは慈愛である。教育愛である。而してそれを充分に補ふことの出来るのは家庭に於ける母親の慈愛のみである。然るに多くの母親が正しい信仰の無い爲に慈愛でなく感情に提はれて、盲目愛に陥ることの多いのはまことに残念なことである。

盲目的な愛、本能的な情は所詮利己的であつて、自我を擴充し、己れの満足を齎すことを以て、まづ、第一義とするものである。これでは結局よい子は育てられない。眞の慈愛は正しい知慧によつて裏づけられなければならない。正しい考へ、正しい研究によつて指導せられ、暖かい慈愛、寛大な保護によつて育てられてこそ、子供は立派に生長してゆくのである。この正しい知慧、暖かい慈愛こそは我等が歸依し歸命し奉る佛の備え給ふお徳の主たるものである。

従つて我等はこの佛に歸依することによつて、始めてこの慕はしきお徳を身に體することが出来るのである。信仰とは、まごころを以てこの尊いお徳を備え給ふ佛を慕ひ、常に佛を離れず、謙虚な相すがたに於て佛を仰ぐことである。この信仰の綱つなによつてこそ始めて、佛の慈悲と知慧とを我身に頂くことが出来るのである。この信仰を他にしては、絶対に正しい知慧を得ることも出来なければ、又永しえに暖かい慈愛も、受けることも出来ない。信仰のないところには常に小さい自我が傲然と存在して、利己的な盲愛、不徹底な研究が頭をもたげてくるものである。

### 明治天皇の御製に

目にみえぬ神のこゝろに通ふこそ

人のこゝろのまことなるらん

とあるが、この態度こそ眞の信仰の相であると拜察する。

### 法然上人の御歌に

われはただ佛にいつかあふひ草

こゝろのつまにかけぬ日ぞなき

とある。この心持ちであつたればこそ、あの知慧第一と稱へられつゝも八十年の長い一生一日も研究讀書を中止されず、老齡で流刑に

遇はれる苦痛の中にも、一切の世人が眞に救はれない慘狀を眺めては、到底坐視するに忍びずとして、一途に佛の慈悲を傳道されたのである。世の母にして、かくの如き正しい信仰に覺めるならば、我子の眞の生長がどんなものであるか、我が子の眞の幸福が何處にあるか、又延いては社會の繁榮がどうして得らるゝかも自ら了解されることであらう。

子供の惡戯、子供の不勉強、子供の放從、これらを責める前に、信仰ある母親は常に佛に接するが故にまづ自己反省をする。何故こんな子供になつたのかと反省する時に、今までの教育手段に誤りが無かつたかと深い眞剣な研究心を起すものである。而して茲に家庭内の改善が實行されてくる。どうかして立派に育てたいと熱望するが故に、小さい一時の苦勞位は何等意に介することなく、佛の如き慈愛に溢れた活動指導が始まるのである。この大智慧の活動、大慈悲の發現こそは、正しい信仰による賜であり、この信仰的態度に立つてこそ、正しい教育が始めて行はれるのであり、かくてこそ始めて眞の幸福が得られるのである。どうか信仰を誤らずに、幸福を間違へずに、お互に淨土の建設にいそしみたいものである。

# 授戒に参加して

堀尾千枝子

本校に於ける年中行事の一つとして、毎年行われている授戒に今年始めて参加しました。本校のこの授戒は伝統的なものだそうであります。

何しろ朝が早いので私達にとつては、それが一番辛かつたのですが何事も辛抱しなければ折角の授戒も受けた甲斐が無いと思つて眠いのを我慢して四日間の授戒を過ごしたのでした。

伊藤宏天先生の講話は、大變わかりやすく、又、面白くお話して下さつたので私達にはよくわかり、とかく私達の私生活と離れ勝ちな、「宗教」と云うものに對して、より親しみを感じる様になりました。第一日目の講話として「人生とはどんなものであるか」と云うことをお話しして下さいたところが一番私にはよくわかり、先生は「折角人として生まれたのだから、どうかして人らしく生きなければならぬ」と云はれました。そして又この様なことをおつしやつた、「人間にはつつしみとはげみとがなければならぬ。そしてこのつつしみとはげみとが戒である。」と、いろいろと大切なお話をして下さいた中で、この二つの言葉が強く私の胸を打つたものです。また、講話の最中に眠くなつて來かけると、急に私達を笑わされる様な面白いお話をして下さいたので、少しも退屈なんかせず、眠いのも何處かへ行つてしまつて、本當によくお話が聞けました。

最後の四日目には校長先生がお釋迦さま

になられて、今迄の伊藤先生の講話を全部まとめられてお話をして下さいた。その時のお釋迦さまの「十の説相をよく保つや否や」と云う問に對して「よく持つ」と誓つたときの私の心は完全に落ちついていました。そして何事をも考えず、本當の純粹な氣持で答えられました。

特に講話の始めと終り、そして、食前食後に唱える「南無阿彌陀佛」のときは周囲のことも考えず、自分で不思議な位落ちついていました。

何しろこの様や授戒を受けるのは、生まれて初めてなので、少しは珍らしかつたのかも知れませんが、四日間は見ている間に済んでしまつた、様に思われます。

私が今度の授戒を受けたことによつて得られたものは、心の落ちつきだつたと云えます。そしてこの期間中に聞いたいろいろの講話を何時までも忘れないで、卒業後も守つて、正しい人間らしい生活をしようと思つたのであります。

(家政學園高等學校三年)

# 尼僧の姿

寺 森 教 山



宗執綱に在任二期八年、やうやく一宗淨化の件を果されたのでありますが、早くもこの大正七年の文中に、明確な指導原理としての三則が示されてゐます。

第一に尼僧として婦女教化の機關として一層組織的に、且つ有効ならしむる方法を取らねばならない。尼僧に名門高貴の出身多き本宗にして、之を婦人教化に利導すること甚だ至らぬこと多きは遺憾な事である。

第二に社會事業に於けるカトリック教會の尼僧が、或は孤兒院に、或は施療院に、或は救貧事業に、殆んど全體の社會事業に亘り活動しつつある十分の一の奮勵を、吾が尼僧界に見得るべく努力せなければならぬ。

第三は東北地方を特に甚しとする無住地寺院の整理に尼僧を活用して荒蕪せる教内の開拓に従はしむべきである。

これら尼僧利用の傳道策を決行するとせば之と同時に尼僧の教育と優遇に一層の改善を加へ、尼僧の爲に宗門大學を公開し、その利用に遺憾なきを期さなければならぬ。

近代の名僧として日本佛教會の最高峯であつたのみならず、近代世界の宗教界の指導者のうちにも數へられた人である渡邊海旭先生は昭和八年一月廿六日敗血症で逝去せられています。いま廿年を経過し、第二世界大戰も終了して八年、日々夜々熱い火花に流血しつづけてゐた朝鮮の悲劇も平和調印に運ばれて來た今日、私はいま心から海旭先生の尼僧への御教示を追想するものであります。

先生の尼僧に對して御教示下さつた御言葉のうち壹月全集下卷に「尼僧活用の途」といふ一文があります。

その中に「佛教界に於ける婦人問題に關聯して忘るべからざるものは、傳道上に於ける尼僧活用の方策である。その教育に於ても稍體形を具へ、その利用に於ても各宗に比して頗る出色のある本宗は、今や一層この問題に精密の注意を拂ふべきである」と書き出されてゐます。これは大正七年七月に書かれたものでありますが、決して三十七年前の文案ではないのであります。今も尚ほその御言葉の通り生き生きとして御指教を得てゐるものであります。海旭先生はこの後、大正十五年淨土宗政界の混亂の中に興望を擔つて淨土

といふ事が記されてゐます。

尼衆學校も、やうやく戦後の苦境を抜け出した様です。戦中戦後を通じ四五名といふ入學者しかなかつた年もありました。今年は二十名近い入學者を迎へました。戦前の數にかへるのは間もない事と存じます。尼衆學校を出て進學の有資格者として幾多の試験をうけて大學を卒業した尼僧達も、十指を屈する程になりました。今なほ大學に學び或はまた更に大學院に學ぶ尼僧もあります。それにつけても海旭先生の御教示を味讀し、社會人類に奉仕し得る佛道實踐者としての尼僧の養成にとめたいと思います。私今春、尼衆學校に四十二年の無爲無能ながら在職したといふ理由ではづかしくも、教育功勞者として表彰をうけました。尼衆としての私自身の半世紀以上に亘る思ひ出を語るには餘りにも長すぎる年月ではあります。しかし今年七十を超えて私は、明日の日の日本の社會に、淨化の源泉として、世界人類に奉仕して呉れるであらう尼衆の姿を夢に見ながら、希望にもえて樂し

く日々を過しています。七十の老婦で二十才前後の若々しい尼衆方と、同一の起居をやりつゞける事は、身の苦勞を考へなければ常に精神を若々しく保たせて呉れる人生の希望であります。

昭和二十六年秋、東京日比谷公會堂で發足した全日本尼僧法國の事業としての尼僧大學の設立は、昨秋京都知恩院に於ける第二回總會に於ても再確認が行はれたのであります。しかもその推進力は、實に淨土宗尼衆各位が海旭先生の御教示にある様な使命の自覺にもとづいて、奮起するか否かによつて成否が分れる事になつてゐると云つても過言でない様です。

世界佛教徒會議に於ても日本の尼僧の新らしい任務が課されてゐる今日、佛教教團に印度以來、二千五百年の間、最も純粹な信佛の燈をうけついで來たと、敢えて信じてゐる私達、尼僧が、たとへ狭くとも淨土宗を基盤として、過去半世紀讀けて來ました尼僧教育への理想を、この機會に更に純化する事を通じ

て佛教各宗各派の御後援を得まして、あらゆる困難の尼僧、すべての佛教各宗の尼僧を受け入れた尼僧教育が、魔事なく軌道に乗ります様に願つてゐる次第であります。

尼僧の道は峻しく嚴しいものがあります。

今日でも尼衆學校の門をたくく尼僧希望の娘さんは月のうちに三人や五人は數へられます必ずしも彼女達のすべてが尼僧とはなり得ない事情もありますが、私は現代の日本の女性の中にもう少し尼僧といふものになる人があつても良いと考へてゐます。尼衆學校が眞剣な尼衆であふれる様な時期が來るものと考へてゐます。尼僧だけが現代世界の過渡期の動亂の中に在つて、人をすくひ社會を淨め、人類に理想を與へ得る存在だと考へてゐるからであります。

それにつけても私は自己の反省の資として渡邊海旭先生の御教示を、時にふれ折にふれて味讀し、文中言外に湧き出づる導き示唆に老心を若返らせて頂いてゐるものであります

## 現代の短歌

## (五)

—釋迢空(折口信夫)

について—

折口信夫はその著「日本文學の發生序説」の中で「文學が一番我々の心を打つのは、悲

峰ごしに 鳴く鳥居つつ 時久し。

山ふところに、日はあたり居り (火口原・大正5)

とまり行く音と聞きつつさ夜ふかき

時計のおもてを 寝て仰ぎ居り(霜夜・大正8)

焼け原の町のもなかを行く水の

せせらぎ澄みて、秋近づけり(郡上八幡)

澤蟹をもてあそぶ子に、錢くれて、

赤きたなそこを 我は見にけり(木地屋の家・大正12)

山々をわたりて、人は老いにけり。

山のさびしさを われに聞かせつ(〆)

人も馬も 道ゆきつかれ 死ににけり。

旅寝かさなるほどのかそけさ(供養塔)

劇精神である。唯其が末梢的に出て来れば、感傷に止るものだが、此を掘り湛へてゆくと人生の深さに觸れてくる」と述べている。

氏は人も知るごとく民族學に足場を置いて國文學上の仕事は大きな幅と深い意義を持つていたのであつて、古代文學の研究家は一應氏の書物に目をとおさなければならぬ事になつてゐる。

釋迢空の歌は上にあげたものだけでも旅のものが多し事にきがつかれよう。これは作者が民間傳承採訪の爲の結果によるのであり、世の學者が書物のみを通してとる態度とはまるつきり異なるのであつて、萬葉歌人の高市黒

人(註)を旅の歌人と

して高く評價したのもあららぎ派出身の迢空であつた。即ち彼の旅の歌にしても自然の時

節による推移、そこに

棲む生きものの境涯、

山から山をわたる人、

海に生きる人々の行動

の中に迢空自身の身を

ひそめ、それらの人々

と共に世の生きがいと

考えようとしたのである。雅號からして何かただならぬ感じを讀者にあたえ、例歌をみてもその歌のもつ「かそけさ」「ひそけさ」にぶつかつて容易ならぬものを覺えるのである。こころみに「海やまのあひだ」からひそけさ・かそけさ・しづけさ・さびしさをぬいてみる」と七三首もある。(この歌集は六一六首ある)この人の歌は幽趣微韻とでも云うのだらうか、やはり古代研究の權威としての、實に驚くべき古語の所有者であり、古典に通曉し切つた人の手堅い牙えとして「、」「。」「句切」を丹念につけられるのであらう。民間傳承をたずねて山深くたち入る作者は、郷翁の昔がたりにききいるロマンチストである。だから歌の感じも、臘月夜か、夜明時と云え、場合によつては夢幻的な時さえもある。短歌季刊(昭22・9)の木俣修の言葉を結語のかわりにのせる事としよう。

——非常に隠士——隠れた人です——といふやうな感じをうけるのです。けれども事實は非常に近代を身に帯びてゐる——近代人間としての雋敏さをもつた方ではないかといふ風に私は感じられます。あのやうに古代を對象とした學問に深く没頭してゐる人でありながら、おそらく他のあのクラスの、どの歌人

邑山の松の木むらに日はあたり、

ひそけきかもよ。旅ひとの墓(多)

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。

この山道を行きし人あり(島山・大正13)

船べりに浮きて息づく蟹が子の

青き瞳は、われを見にけり(多)

以上海やまのあひだヨリ

緑濃き 能登の島かも。海ぎはまで、

かたぶく島に、懸麥結れる(灘・昭和2)

歳深き山のかそけさ。人をりて、

まれにも言ふ聲きこえつつ(青嶺温泉・昭和4)

以上春のことぶれヨリ

かそかなる幻——晝をすぎにけり。

髪にふれつつ 低きもの音(埃風)

青草の生ひひろごれる 林間を思ひ來て、

ひとり脚をくみたり(多)

ひと夏を過ぎむ思ひ かそかにて、

乏しく竝ぶ。煮たきの器(多)

あめりかの子ども 泣きやめ居たりけり。

木の葉明るき 下谷の小屋(多)

降りしむる 大き 木の股。近々と

親鳥一つ巢にイちてをり(多)

以上短歌研究昭和28年1月號ヨリ

よりも、近代文學に對する勉強といふか、近代的なるものに對する關心が深く、その造詣は古代に對するものよりまさるとも劣らないではなからうか。……

私は例えば窪田さんと加土岐さんとか以上に近代的なものを、そこに感ずるのです。和歌の本道に立つといふか、短歌といふ文學が文藝の上に占める分といふものをよく心得てその中にちゃんと、近代を据ゑてをられるところを私は認めたいと思ふのです。

(註) 寫生によつて「人生の深奥所」に達するといふ赤彦のそれとちがつて、尋常人の鍛錬によつて得られぬある本質の「眼」や、

「五體」が寧ろ不氣味なほど底から光つて響いて來るのである。……中略……萬葉でいへば、同じ旅の歌でも、人麿より黒人に、この人は近く、自然の觀照に於ても、赤人より黒人に深みを見られるとくに、この人は複雑である。しかも黒人の境地を出發點として涯しもない一つの道に踏み出したかの觀がある。この特異にして幽鬼のやうな經驗者は、幽かに息づいては山澤をわたり、ひそかにと息を凝らしては林草の間をたづねゆく。昔こそきかね、道のはるかに立つ埃にも眼を病むのである。……以下略(黒衣の旅びと・白秋歌話) 28・7・22 上木彙葉(心の花同人)

○(五月號本欄正誤表) 十行目接吻(接祇) 十七行目項(頃) 二十三頁十三行目舞臺にても(舞臺にも) 二十一行目消費者(消費者) ○(八月號二七頁) 藤田寛海氏が、山讀形大學とあるは山形大學の誤り

## 次號豫告

### 「働く人と信仰」特輯

何人も働かざるものはない。しかし働く場はいかにも廣い。どんな場でどんな信仰を持つてゐるであらうか

# 私とみはとけ

柴田 玄鳳



## 一 佛とは何か

佛説阿彌陀經に

彼の佛を何故に阿彌陀と名づくるや。彼の佛の光明無量にして十方の國を照すに障礙するところなし、故に名づけて阿彌陀と云ふ。又彼の佛の壽命及び人民無量無邊なり故に阿彌陀と名づく。

とある。私の阿彌陀佛觀は之れに始まり。又之れが全部である。

私は幼少十一才で生家を離れて、淨土宗の寺に弟子入りした。そして晝間小學校へ通學する外は、朝夕、師僧の命に従つて佛前の給仕や、境内の掃除や、使い走りをさせられていた。その頃には

佛様とは木佛金佛のことだと思ひ、又漠然とながら御本體は遠い極樂という所に居られるのであろう位に考へて、子供心ながらに畏敬の念を深めて居た。十六才で京都の敎校という小僧ばかりの中學程度の學校へ行つてから佛は無數に多くおられる。六方諸佛とも云い三世にわたつて無量の佛がおられる。其の何れもの佛が、各々三身を具えて居られること

を教へられた。

三身とは法身、報身、應身であつて、法身とは、釋尊の説かれた法であると共に、宇宙森羅萬象の本性(ほんしよう)、即ち眞如の理である。吾々衆生も之れを具えていて、之れを佛性という。次に報身とは人間が佛道を修行し、數千億年の功徳を積み、遂に無上正覺という最高の悟りの位に到達し佛となり、多年の善因に報いて立派な淨土を構へ、衆生を濟度して居られる佛で、阿彌陀佛も其のお一人である。應身とは時と人と場合に應じて、報身佛が人間界に現はされて救濟される姿であつて、釋尊の如き方が、それであると教へられた。

生來痴鈍な私は、教えらるまゝに、何事も鵜呑みにして、そういうものであるのかと思ひ込んで、多年を過して來たのである。尤も其の間にも時には疑念を懷き、先輩にたゞしたこともあるが、本宗は理くつ抜きで、佛も淨土も形象の上からそのまゝに仰信することが、建て前であると訓され、此の宗義を守ることが宗門に忠實な所以だと考へていた。

## 二 信仰は生きものだ

然るに此の十數年來、色んな機縁に相遇し自分でも期せずして上述の如きことに對して、考察することを餘義なくされた。今、煩わしいが、自分と同じような經路に立つ方もあらうと思つて二三を書いて見る。

其の一は昭和廿一年頃の事である。ある信徒の家で、二三の知識人と談話中に、末法濁世の話となつて、私が世間も時代を経るに従つて邪惡となり、人間も下落する。此の事は日々の新聞を見ても、ます／＼兇惡な犯罪が増加することで見られると云つたところ、座中の一人が、それなれば昔ほど良いということとで、何億年も前のアミール時代が遙かに善いと云うことになりはせんかと反問されて、すつかり面喰つたこと。

その二は矢張り同じ頃であつたろう。朝のラヂオ放送で、尾崎行雄翁の話の中に、孔子のような三千年も昔の野蠻人の言つたことを云々とあつて、その暴言さに驚き、且つ憤慨した。しかし能く／＼考えると、三千年前はたしかに野蠻時代に違ひない。孔子は其の時

代に、特に優れた聖人ではあつたが、當時の社會も人智も、今からは想像も出来ない位、幼稚であり、「子曰く」其のまゝでは、今時通用しないことが當然である。ひるがえつて佛教に關しても同じように、嚴しく再検討されねばならぬのではないか。

第三には一昨年であつたか、京都の知恩院で或る會合の席上、何かの話の間に某氏が、信仰は生きものだよと云つた。私はこの簡単な言葉が強く耳に残つた。そうだ信仰が死物であつてはならない。生きてゐるものなら、常に榮養を攝取し、消化し、同化し、老廢物は排泄して、ぐん／＼成長しなければならんと氣付いた。

此の外にも、まだ幾つかの動機があるが今は省略する。

## 三 宗教と人間

そこで今の私の考えとしては、第一佛教でも基督教でも、總ての宗教は人間の見出したものだということである。この様なことは今更云うまでもないようであるが、從來やゝもすると、宗教が先きにあつて、人間が後から

出來たものと考えたり、又は宗教は天地普遍の眞理であつて、人間はそれに左右されるものゝように説かれるが、其の眞理を人間のものとす所に宗教が成立つのである。

例えばイエスがあつて、その言行が基督教となり、釋尊が生れて、その教が佛教となつたので、イエスも釋尊も天の神から遣わされたのでもなければ、兜率天から天降つたものでもない。

この構想に基いて佛說無量壽經に説かれてある阿彌陀佛の因願説をみて見よう。經には無數劫という遠い／＼大昔に世自在王佛という佛が世に出て、衆生を濟度して居られた時に、一人の國王が居て、佛の教法を聴き、大に喜び、王位を棄て、出家し、法藏と稱した。法藏は高才勇哲、世に比類なく、殊勝にも世自在王佛に向て四十八箇條の誓願を立てた。その第十八番目が有名な念佛往生の本願であつて、

十方の衆生、至心に信樂（しんぎよう）し我國に生れんと欲し、乃至十念せんに、若し生れ得ないということであれば、我れは誓つて佛に成るまじ

というのである。そして無數劫に涉つて思惟を凝らし、佛道を修し、遂に西方に極樂淨土が出来上り、昔の法藏菩薩は正覺（佛の位）を得て阿彌陀佛と成り、既に十劫を經過してゐる。此の故に南無阿彌陀佛と十念する者は必ず七寶莊嚴の極樂に往生すると説いてゐる。

此は何を語らんとするものであらうか。

#### 四 彌陀は宇宙生命

私は本文の冒頭に、阿彌陀という名は、光明無量、壽命及び衆生無量であるとする、阿彌陀經の一節を引用した。時間的には光明、空間的には壽命が無量であるということは、所謂絶對無限の法身佛を指したものである。法身は宇宙に遍滿し、天體星宿、山海草木、鳥獸虫魚等の一切萬象を顯現する大生命それ自體である。

宇宙大生命體が常に躍動しつづけているというだけでは意味をなさない。如何に天體が運行しても、動植物が進化繁殖しても、たゞそれのみでは盲目世界である。その万物生成の最高目標たる人類にまで進展し、人間が理

智を明かにして天地自然の妙用を究め、宇宙の本性に即應する文化社會を具現し、万物共榮の生活を營むに至つてこそ、其の大理想が實現されるのであらう。洵に人類の出現こそは宇宙生命の華である。之れに依つて無數の佛が出世し、成道される途が開けるのである。

無量壽經に法藏菩薩が無數劫の思惟、修行を積まれたというのは、何十億年かの昔に、太陽系の一遊星として地球が形成され、更に何十億年かを經て單細胞の動植物が発生し、更にまた幾千萬年にわたつて進化を重ね、凡そ百萬年ほど以前に人類の始祖が発生したと云う道程を指したことになると思う。

斯様に、事實として地球上の人類を描いて何れに佛を知るものがあるぞ。全く人間あつての佛である。されば人間の發生は阿彌陀佛の十劫正覺成就の日である。草木國土悉皆成佛の時である。

法藏とは一個人の名でないということは、大法輪誌の第十卷十二號に柳宗悅氏も「歴史的な人間を煮つめて、その精を濃く出そうとすると、法藏菩薩の姿で現はれたと云つても

よい」と述べて居り、氏が淨土門の第一人者として崇信している一遍上人は

阿彌陀如來は因位（お悟りを開かれる前の位）に一切衆生の正覺を成ぜしめんと誓ひ給いたれば、本願成就して即ち衆生の往生は南無阿彌陀佛と定まれり。されば彌陀一佛の正覺は、即ち九界の衆生の正覺にして衆生の往生は即ち阿彌陀佛の己身に在り。

と説かれている。上人は同じことを彌陀の方から眺め、柳氏は人間の方から云い、私はそれを更に現實的に考へたのである。淨土宗でも大原談義聞書鈔に「諸佛の無極の慈悲、衆生の迷倒を哀れんで、法藏の發心を示現す」と述べてある。

但しこの様な説話は一人若しくは少數者の空想で作られたものでない。二千年も昔の純眞にして敬虔な佛教信徒の間に、何時しか盛り上つた信心の所産であるから、不遜にも今日私達が科學的なメスで解剖を試みても、決して矛盾することはない。寧ろそうすることに依つて、教義の深遠と確實さが證明されるのである。

## 五 三身は一體

佛に三身ありというたのは、説明の便宜上一應分けて見たのであつて、元々佛は唯一無二である。脈々として躍動しつゞける宇宙の大生命それ自らである。

物理學者の權威、湯川博士は其著「目に見えないもの」五九頁に「そこでは最早、精神と物質とは表裏一體をなしているのかも知れない。それはある絶對的な、直觀的な知識を意味するであらう。それこそ眞の知識であるかも知れない」と云い、米國のアインシュタイン博士は、別の言葉で「物質とエネルギーは同一である。少くとも兩者を轉換することが可能だ」と證明している。

宇宙は單なる物でない。生ける命である。吾等はそれを佛と呼ぶ。

佛は無限の智慧と慈悲の靈德に外ならん。智慧は光明と輝き、一切を照らし、慈悲は生命として現われ萬物を形成する。現に私達はこのに尊き人生を営みつゝあるのである。

淨土宗に於ては朝夕の勤行（おつとめ）の作法として、初めに佛前に香を焚き、次で

一心に十方法界常住の佛を敬禮し奉る

と先づ佛を拜禮する。その佛は十方世界に限りなく遍滿する光明と、常位とて無量の生命を具えたもう方で、三身に分けた上では法身である。

そしてその次に十方如來、釋迦如來、彌陀如來、觀音勢至等の諸の大菩薩を招待する。此の日常の作法から見ても宗門の深い妙義が味われる。

宗義の正面では求むる所は西方の極樂淨土歸する所は彌陀一佛と限定し乍ら、一方には大乘佛敎の根本敎理に基いて、まず十方の佛法僧に歸依拜禮し、十方如來、釋迦如來を招請してお勤めを修行することになつてゐる。私はこれでよいのだ、これが本當だと思ふ。初めには佛敎一般の敎の上に立つて法身常住佛を、そして次に別しては教主釋尊、願王阿彌陀佛等を迎える所に佛敎があり、淨土宗があるのである。

思ふに何時の頃からか、宗義が極端に狭められ、佛敎から離れて孤立したような、融通のきかないものに硬化したのが現状である。

淨土宗第二祖證空上人が徹選集に「單聖道門

の人と、單淨土門の人とは之れを知るべからず。聖道淨土兼學の人のみ之れを知るべし」と云われてゐる。宗義にも廣く深く巾と奥行きとを持たせるべきである。殊に世間一般の學識が高められた現代にあつては、從來の獨善的な考へ方を捨て、宗内に限らず、誰れにでも首肯され得る敎義を樹立しなければならぬ。

私、現在の信心は、理想の上では吾れも十劫正覺の彌陀同體なりと觀じ、現實を顧みては煩惱具足の凡夫、偏えに大悲願力に乗ぜんことを願ひ、常に仰いで法身無邊の常住佛を欣慕し、まして光明攝取の往生業に精進するものである。（淨土宗布敎師元敎學部長）

### 讀者だより

和歌山の被害は豫想以上で、許されて一寸行きましたが、小生住宅は床上七尺以上浸水、流木の爲家屋半壊となり、家具衣類、其他一切流失し、全く家族全部裸一貫となりました。お蔭で家族は全部無事で、今後又大いに張り切つて、出所の日を待ちつつ働く覺悟です。どうか今後共宜しく。

スガモブリズンにて 田端正夫

# 仰 信

—— やさしい佛教の話 ——

中 野 尅 子



## 萬人宗教

A 金儲けが宗教だ

——と云うことは、  
どうもよくわかり  
ませぬ。宗教は金  
儲けの元になるも  
のぢやありません  
か。或は、政治や  
藝術、教育や科學  
の根本になるもの  
ぢやありません  
か。

○ それぢや例へば  
木の根のように、  
土の中に隠れてわ  
からぬものが宗教  
で、地上に現われ  
てよくわかる幹や  
枝、葉や花が、政  
治や經濟、科學や  
教育に當るとでも  
云うのですか。

A そうです、どうも宗教と云うものは特別に變つた、神祕な  
ものだと思えませぬ。

○ そうぢやないのです。例へば根と幹とどう違います。地中に在  
る根が地上へ出た處が幹です、その幹が末へ行つて細くなつて居  
る所が枝です。成程、幹と根とは作用は違うが、太い根が其儘太  
い幹となつて居り、少々細くなつて枝になつて居るが、皮も芯も  
一寸も變つて居りませぬ。葉や花は、又其の枝の變形したもので  
一貫作用をして居ります。恰度人間の目や鼻や、心臓や胃袋、骨  
や皮、毛髪や爪が、夫々形も變り作用も變つて居るが、お互に口  
が胃袋の爲めに働き、胃袋が腸の爲めに働き、腸が肺の爲めに、  
肺が頭腦や顔の爲めに働き、互に主となり伴となり、本となり末  
となつて働き合つて居るように、切り離す事の出来ぬ一身一體、  
一脈の機能體で、變つて居るようで實は變つて居らぬ一本のもの  
です。だから政治でも、經濟でも、或る部分から云へば政治で、  
或る部分から云へば產業で、質的には區分出来る一如のもので  
す。

だから、宗教の信念で政治をやり、宗教の信念で働き金を儲け  
宗教の内容を藝術的に表現し、宗教の原理を科學することが科學  
だと思ひます。

B あゝ、それでわかりました。それぢや吾々學生はウンと勉強す  
る事が、やがて宗教ですネ。

○ 否や、今、科學して居る其事が宗教です。お百姓は百姓してゐ  
る事が宗教で、餅屋は餅を搗いて居る事が宗教、奥さんは便所を

拭いて居る事が宗教、坊さんは勿論お葬式して居るなら、お葬式して居る事が宗教、保育園して居るなら、其の保育園事業が宗教人間の頭と尻とはどちらも人間で、値打に上下はないが、口へ喰わせる牡丹餅をお尻へ持つて行つてはいかぬ。それは役目が違ふ役目は違ふが、一つ生命を生きる内容は同じだ。現象の上混同してはいかぬ。

B それぢや私も、先生に負けぬよう一生懸命にやります。

○ そうだ、それでこそ皆が立派な宗教人だ。宗教家や、宗教屋は有つても無くてもいい、皆が宗教人になれば、これも総合的に解決する問題だ、宗教法人や宗教行儀は有つても無くてもいい。萬人宗教になり、法界が擧げて宗教になつたら、スク／＼伸びる、全體がスクラムを組んで天國淨土をやるのだ、死んでから先きでない、生きて居る間にやらねばならぬ。

C けれ共一世紀や二世紀の間には、そうなりませんネ……。

○ ならぬかも知れぬ。然し今、そう云う信念を以て闘ひ、そう云う理想に燃えて居る「私」と云う人間が現在一人あると云う事は其儘、世界を淨め、世界を燃やして居ることだ、「此の一人」がある爲めに世界は既に淨土になつて居る確信があるのだ。釋尊は「吾れ一人が今成佛したと云う事は、取りも直さず全人類が既に救われた證據だ、人間が救われると云う可能性ある事を身を以て示したのだ」と宣言して居られる。イエスは十字架上に傑けにあらながら「吾れ世に勝てり、人々は罪より贖はれて、潔められたり」と叫んで居られる。私や君達が、全人類に先立つて先づ救わ

れ、自覺して行かねばならぬ。すれば萬人がついて来る。

## 大神祕

D 今、先生が云つて下さる宗教の意味ならわかるが、昔の人のやつて居られる宗教や、新興宗教とか云うのには随分、如何がはしいのが有るのぢやないですか。

○ 「解る」のぢやいかぬ。例へば未だ東京へは本當に行つた事は無くて誰かに聞いて居るだけ。或は今晚は久し振りにエビフライだぞ、と、天ぶらの匂ひばかり嗅いて、まだ喰つて居らぬのぢやないか。ノドばかり鳴つて腹はふくれて居らぬのぢやないか、それでは眞に解つて居る内には入つて居らぬ。矢張り「解らぬ」仲間で、古人も「吾れに正受せしめ給へ」と痛切に求めて正受、正觀、正念に住することを宗として居られる。スイッチを捻らねば點燈せぬのだよ。スイッチに觸れて居るだけだ――

D 痛いナ、而し僕、本當に解つて居ります。

○ 解つて居るのでなく「感ずる」のでなければいかぬ。「直感」するのだ。キリストは「汝等、野の百合の花を見よ」と指して居る。見よ、觀よ、百合の花を見よ。山を見よ、河を見よ。人を觀よ、馬を觀よ。バケツを看よ、下駄を看よ。見よ、觀よ、視よ、一切を熟視徹觀すれば、必ずソコに神を見る、佛を見る。大生命の流れ、噴激する無限活動を見る。それを此の「活ける如來」を見ずに、多くの人は先づお金を眺めて、此の百圓札が寝てゐる内に千圓札に變つて居たら――誰か間違つてもいいから、十萬圓斗

りボイと家の中へ放り込んで行つて呉れぬかなア、明日返へすに  
してもいいから、一晩だけでも十萬圓抱いて寝てみたい等と云う  
連中が多い。そして願くは大慈大悲の觀音様、我れに此の靈驗を  
授け給へと拜んで、株價の騰りますようにと頼む。子の一命が取  
り止められますようにと拜む。にくい亭主が今晚の内に一息で死  
にますようにと祈る。ミス〇〇に當選しますようにとて氏神様へ  
願をかける者がある……斯んな慰安の宗教、欲深信心が多い。精  
々いくところでサンタクロースのような都合のいい神様が、天よ  
り舞い降りて来て、福を持つて来て下さる程に信じて居る。多神  
教だ一神教だと云うても、皆超在神教で、人間とは別な偉力のあ  
る神を想像し、又此の世を隔絶した處に極樂を假想して、其國だ  
けが佳い處で、此世は浮世で娑婆で、穢土で罪の國とせられて居  
る。何も彼も唯物的な考へで、辻褃の合わない點は、死んでからで  
なければわかれぬ、信仰が無い爲にはわからぬと蹴て了ふ。啞然と  
して取り付く島のない者は、仕方がないから「僕は無宗教だ」「科  
學主義だ」等と云うて名乗る。名乗つて見ても實は落付かれぬ。眞  
の宗教は科學と對立して調和せぬものでもない、現代人には許容  
せられぬものだなと云う變な神祕主義でも無い。寧ろ科學を基  
礎として科學以上に科學するところに、眞の神祕主義も宗教であ  
る。

○ 其の神祕主義を僕も探して居るのです。

○ それ又、「探す」からいかぬ——。何も探がさなくてもいい、そ  
れタバコの吸殻が落ちて居るぢやないか、それバラが散つた。あ

のハラ／＼と散る花瓣の一つにも、大宇宙の動き、神の默示があ  
る。今朝もおまんまをたべたでせう。

D ハイ。

○ そのおまんまを喰べられたと云ふ事も天地法界の御恩の如來で  
たべられたのだ。これが大神祕、大恩寵だ。如來とは一如眞如よ  
り來生し來現したと云う意味で、君達も私も、皆、如來、此のマ  
ッチ一本、梨一つまでが衆縁和合せなンだら出來上らぬのだ。こ  
んな尊い事、有難い事があるもンか。それを自分一人で金を儲け  
たように思つたり、自分獨りで鶏の卵を産ましたように云うのは  
勿體ないにも程がある。

D 今日は慘々叱られづめだ。

○ 叱りづめでなく讃歎しづめなンだよ、氣持がいいだろう。叩か  
れぬと目が醒めぬ。私がよく拍子木の繪を描いて、人間も打ち合  
わされなくては音が出ぬ。人生、大自然の如來と衝突して火花を  
發しなくては、信仰は出ぬ。擊剣でも拳闘でも叩かれなくては腕  
が上らぬ。君等もこれからは、なるべく六つかしい本を讀め、小  
説や漫畫なら誰でも讀める、小學生も漫畫が好きだが、誰でも骨  
が折れなくて讀めるからだ。而し低級な漫畫では大した新知識も  
得られぬ。人間も向上せぬ、自ら六つかしい問題にブツかり、大  
疑問と正面から取組んで行く時、最も大きい喜びも大發明もあ  
る。それが宗教的態度です。

# 光

○「白魚」と云う映畫を見る。暗中摸索する小説家と、ソ聯から来た歸らぬ夫を待つ人妻との戀愛を主題にした單純なもの。しかしスクリーンには、鎌倉の大佛さまや圓覺寺の禪堂が美しく出て来る。靜寂を破つて、「バンバン」と、座禪僧の背中を叩かれる音が響く。その外は、無言の行があるだけ。靜中の動と言ふ所。

「マニア人、ゲオルギウの作品を読む。弱小民族が二枚の板にはさまれて、生死の間をさま迷う姿は誠に哀れ。同病相憐れむと云うか、心を打たれる。苦しんでいるのは、われわればかりではないのだと、自己慰安してみる。しかし、これなどは、二つの國の人々に讀んでもらいたい。漱石の「草枕」の様な悠々せまらぬ境地を作品とした時代を戀しく思ふのは、弱小民族の感傷であらうか。

靜中の動と言ふ所。

少しでも日本人らしい人間を探究し、何らかの幽玄味を添えようとする、必ず寺が出るし、佛教信仰が出て来る。こんな所に有形無形の佛教が残っているのだ。さて、あの映畫をみる人は、どれ程のものを汲みとつて行くのだらう

○「第二のチャンス」と言う、ル

○「たぬき」という芝居。コレラで死んだと思つて葬られた人が火葬寸前に生きかえる。常識の發達した大人は、生更つたと思わぬまゝに、當人「たぬき」を決めて人生振出しをはじめたが、我子だけは、すぐに觀破つてしまう。今更乍常識に邪魔をされる事の多いのを氣がつく。照藏の穩亡が枯淡で茶でも點ずる職の如く。

○趣味にも色々あるが、釣のこと「われわれは、モルモットではな

はよく聞く。同じ鮎釣でも、「まぶいのだ」なよりも「ひらぶな」の方が面白いと云う。苦勞が一段と多いからだそう。さつま芋の餌をねり七つ道具をかつぎ、根氣よく竿をい。銀座のオキナの大久保さんもなげ込む。その一人。此間は阿彌陀經の普讀を習うのに、やはり僧侶方のをし

鮎の友釣りも、場所の選定に苦を習うのに、やはり僧侶方のをし勞する。そして、それが收穫へのじゆう聞きたいとわざ／＼とりよ最大の道だとか。釣をやらぬ者はめたテーブルコーダで、私に吹込この話では、その苦勞の限度も分みを依頼されました。佛教界の各らぬが、趣味も、こうした關門を名士に話を聞き、借物でない一つ通つてこそ、始めて自分のものとの信仰を樹立されているようだ。なるのであらう。

○時候にかゝた様な話だが、廣島の御殿場講習は百名を突破、皆張では相變らず、原子病で死んで行切つてます、宿泊準備が間に合えく人が絶えないとか。生々しい傷ばいいが」と古屋道雄師鐸しい悲痕が、發展して行くのである。ア鳴。

○「淨土宗保育連盟の十七日から

貴重な資料として、大いにその研究の成果をあげているとか。所で廣島の市民達は激昂して曰く、

# 音

## 開教物語

## 沖繩の宗教と袋中上人

内山 憲 尙

## 一、沖繩人の信仰

沖繩固有の宗教として古くから琉球人全體を支配して來たのは女君（聞得大君）である。傳説によれば開闢の時天帝子に三男二女あり、長男は國君の始となり、次男は按司の始となり、三男は百姓の始となり、長女は「聞得大君」となり、次女は祝女ノホミヤイの始となつたと説いている。

古事記に於ける天照大神の存在と同じ様な考え方である。しかも女神であることは大古に於ける母權時代を物語るものである。

聞得大君の下に三社あり「大あむしられ」と云う、その下に更に「のろ」と稱する神あり、のろ神は一部落に一社を普通とする。のろ神の下に更に「根神」がある。

更に各家には火の神（かまどを司る）があつて、三本の石を並べて拜している。

宗家（本家）には必ず、佛壇、神棚、火の神の三つが祭つてある。

その外に俗信が非常に多く、陽石、魔除けや呪物崇拜、或は精霊崇拜や「ユタ」と稱する巫女があり、夢占や、病氣、運命の判斷をする、ユタが神がかりになり、身振いをする（ユタが神がかりになり、身振いをする）と神のお告げだと稱す

る。神とは信者の祖神である。

古有の宗教の外に、道教が大きな役割りをなしている。道教は中國より、明の時代に入つたものらしく、其の經傳太上成應篇が譯されて廣く讀まれた、教義も天然崇拜、因果應報等琉球古來の宗教と相通するものがあるので不知不識の間に民心にくだり込んで行つた。

要するに、祖先崇拜を中心とする、倫理を中心としたものと、所謂自然宗教的なもの、俗信とであると云うことが出来る。

## 二、沖繩の佛教

沖繩へ佛教が初めて入つたのは今から六百九十數年前、英祖王時代の文永年間（一九二四—一九三四）僧禪鑑が那覇に漂着し、王は極樂寺と云う精舎を建てたと云われている。其後察度王時代に日本から賴重法印が渡來し、眞言宗波上山護國寺を開いた。更に尙泰久王の時（二一一〇—二一一六）京都の僧芥隱が渡來し、王の信任を得、廣嚴、普門、天龍の三寺を建立した、降つて尙眞王の明應元年圓覺寺を建てた、これ琉球に於ける禪宗の總本山で、琉球第一の巨刹であつた。

これより三十年後の大永二年上野の僧日秀上人渡海して金武に上

陸、自ら彌陀、藥師、觀音の三像を刻し護國寺に奉安し、各地を巡錫した。

慶長八年（一六〇三）浄土宗の袋中上人渡來して、國人を善導し琉球念佛を始めた。（袋中上人については後出）

島津藩が琉球を統治するや眞宗は薩摩の國禁であつたので、琉球でもこれを禁じ、安政二年泉河仲尾次政隆等十三人の信者は八重山に流刑に處せられた。明治に入つて十年田原法水師が渡琉多くの困苦を忍んで布教をなし、今日の眞宗の基礎を築いた。

### 三、袋中上人と沖繩

袋中上人は天文二十一年正月二十九日（一五五二）福岡縣岩城郡磐前村西郷土合に生る。上人は賀茂全兵衛の第二子にして幼名を徳壽丸と云う。

十四歳にして剃髮袋中と稱す。二十歳の時足利學校に行き、大澤の圓通寺（朽木縣芳賀郡大沼村にあり、名越派の總本山であつた）に到り圓頓戒を受けた。

二十四歳の春増上寺に入り、二祖三代の相承を受けた、後、惠心僧都の往生要集を讀み法眼開け、六時勤行日課六萬意ることなし。

慶長八年（五十二歳の時）九州に下り、平戸より支那に渡航せんとして果さず、呂宋を廻航し、琉球に入る。國王尙寧上人を信任し桂林寺を建てて請じた、王は自畫自贊の一幅を上人に贈つてゐるがそれには「桂林を創闢し、請て吾師と仰ぐ」と書いてゐる。

上人は滞琉中教化を怠らず、一般庶民村人のためにつとめられた。即ち琉球念佛によつて、念佛の法悦に浸らしめ、琉球往來を著して善心を起し、惡志を懲戒せしめた。その弟子の儀間眞常は支那福州から甘藷の苗をとり、島人に植えしめた、地質惡く、風害甚だしく食糧に乏窮していた島民はこれによつて救われ甘藷の栽培盛んとなつた、後甘藷は琉球から薩摩に傳えられて、薩摩の人は琉球芋と云

つた。又砂磑の精製法も眞常が天和九年支那より傳えたものである。袋中上人は馬高明の請により「琉球神道記」五卷を撰述された、第一卷から第三卷は印度支那兩國に涉り、第四五卷は琉球の神道と本邦の神道を併せ記している、西部神道について詳記されている。琉球の當時の宗教を知る好資料である。

五十五歳鹿兒島に歸り善導寺に二祖聖光上人の遺跡を拜し、石見より上洛され、六十歳の時三條橋畔に檀王法林寺を建てられた。

八十六歳の時木津川を下る内綴喜郡飯岡に下船され、こゝに西方寺を建立され、寛永十四年正月二十一日稱名相續のうちに正念西化せられた。

袋中上人の琉球に於ける三年の功績は大なるものである。今度の激戦で桂林寺もなくなり、昔の桂林寺の址となつていた縣立病院中の袋中上人行化碑も影をなくしてしまつた。

### 四、新しい沖繩の宗教

現在の沖繩の佛教寺院は七ヶ寺であるがあまりにも、慘めであると云える。戦前の本當は焼かれてしまつて復舊にはまだ遠い感がある、一ヶ寺（眞言宗）だけは新しい本堂を建てられたが、あとは民家のまゝバラックの中に本尊を安置してゐるにすぎない。

キリスト教は大きな教會をどしどし建て、病院、授産所、幼稚園が開かれて行く、教會は新教舊教を入れて六七十位はあるだろう、そして若い人たちに呼びかけて布教の實をあげてゐる。物と熱との兩武器を持つて時代の波にのつてゐるキリスト教は十年二十年先には大きな力を持つようになるのではないかと思われる。

七月九日、佛教各宗の方々にお集りをいただいて、座談會を持つて貰つたが、浄土宗だけは見えなかつた。浄土宗もつまらない内輪喧嘩に無駄な金をつかうのはよして、桂林寺でも復興しなければ袋中上人に對しても申し譯がないのではなからうか。（日本童話協會理事長）（ハワイ開教に次ぎ、本日は沖繩開教をお願いしました。來月は北海道を石上博應氏）

## 舞台裏の人



## 秘められたる苦心

—小道具方三代目與兵衛氏—

今月は訪問の足を、小道具方藤浪氏の宅に向けた。小道具の藤浪といえは演劇の世界では余りにも有名である。特に先代の三代目與兵衛氏は名人の名をほしいままにせられた。隅田川のほとり、歌舞伎三座の跡もゆかりの猿若町の御宅に伺う。いろ／＼と小道具を作っている仕事場の横を通り、奥にて、奥様、當主の光夫氏、令弟隆之氏から交々お話を聞く。

「今日はひとつ、先代の與兵衛さんの想出話を中心ですね、我々世間のものゝ氣がつかない所謂縁の下の力持ちといえますか、登壇せざる俳優と申しますか、俗にウラ方と云われる舞台裏の方々の御苦心をいろ／＼承りたいと存じますが……」

「大體舞台というものはですね、作者から演出家の手許に脚本が廻ると、その構想下で、俳優と舞台美術とが一體となつて上演されていくわけで、その舞台美術を受持つものに、

我々小道具方、大道具方、衣裳方、かつら方照明係と分れているのです。これらが今言われた舞台裏の人々です。仲々表に立たないだけに苦勞をかつてくれる人が少いですね」

「小道具と云いますと、大體手先で扱うものたとえば刀とか箱、碁盤、杖と云つたものですか」

「まあそうです。大道具が不動産なら、小道具は動産ともいえます。櫻樹の櫻の枝も、手にとつて舞う場合は小道具です、はつきり

とした區別もつかないのがありますが、昔からの仕来りでちゃんと決つています。ふすまは大道具だが屏風等は小道具です、佛壇も私共です」

「累の芝居で、どくろをのせて漂う塔婆は手に取つて、へしおるから、小道具ですか」

「まあそうです、床においてある置物でも、馬、虎、犬をはじめ佛像等も私共の方です」

## 佛像もへちまて

「佛像はどうやつて作るんですか」

「本來の佛師ですと、乾漆の佛體は、木心で手首をつけ親骨をつくつて、それに布に漆を塗つたのを何回も巻き、其上に香木の粉末（マッコウ）と生漆を混ぜたもので肉付けをやつて、黒漆を塗るといふ危介なものです。所が小道具では、竹骨とへちまと和紙で、手際よくやつてのけます」

「へちままでは細工がむつかしそうですが」

「いや仲々云うことをきゝますよ、まず、竹で骨組を作つて、紙を張つて大體のポーズを整える。そこへ、へちまを細く裂いて金鋸でうつて柔らかにしたのを、ニカワではりつけ肉付けをして、焼こつてで凸凹をつけるんですが、自由自在に細工ができます。そこへ胡粉

で地塗をし、金箔を置いて、つや止めをする」

「衣のひだは？」

「大きいのもこてで大てい出せます、細いのは、かんじよりをくつつけるんです。一つお見せませう」

持つてこられたのは一尺余の立派な金色燦然たる佛像である。持つて見ると馬鹿に軽い「軽いでせう。其も一つの大きな取柄なんですよ。舞台が變るといろ／＼の道具を運んで片付けるのに限られた短時間でやるのには之でなくちやならないのです。一間の地藏様でも指でつまみ上げられます。それに落してもこわれません弾力性があつて。堅牢そのものです」

「こういう製法は今まであつたのですか」

「先代が苦心して考えたことで、今ではあちこちでもやつてるようです。それに何といつても竹とへちまと紙ですから低廉此上なしで、世界無比のものでせう。天平でござれ、白鳳でござれ、藤原でもいと、かんたんへちまとコテでやるのですからね。時代によつて形を變えるし、又古びをつけるのです」

「古びとは」

「ラックスに油煙を混ぜて綿で塗つたり、泥繪具で汚して注文のまゝに古色蒼然とするわ

けです」

「余り軽いと何だか變ですね」

「まさか、お芝居を観てる人が手に取らないでせう」(笑聲)

「昨年、鎌倉の大佛七百年祭で花祭りがあつた時の白像と誕生佛は傑作でしたね」

「あの佛像は、東大寺の誕生佛を模して作りました」

### 妙音を出す白象

「象は眞に迫つていましたね」

「あれも例のへちまですよ。何しろ大佛さまの七百年祭というので父も精魂こめてやつていたようでした。動物園へ何度も足を運んで實態を見てかかつたわけです。方眼紙に縮尺で書込んだのを基にして竹で骨組をして、和紙をはり、へちまをにかわではり焼ごてで肉づけをした上へ、もへやという布を張りました。足は太さを表はすために燈心を袋に入れたのを詰めたのです。鎌倉市中を歩くために軽いようにと考慮を配つたものでしょう」

「随分あの象は行進しながらアイスクリームを食べたそうですね」(笑聲)

「大分餌をやりましたね。人が前足と後足と二人で、前の人が鼻を動かし、後の人が鳴く

音を出したものです」

「どうして鳴いたんですか」

「やゝ長目の桶の形をしたものの底に當る所に皮を張つて、その中心に強い絃を一本通しその絃を猫の皮で挿んで、しごく、いかに象が鳴いたような音を出します」

「手間が相當だつたですね」

「職人衆も手傳いましたが、半月程でした。一人なら一月半はかゝるでしょう」

### 名人氣質

「所謂小道具方として企業として独立して出發したのは明治十八年の初代興兵衛さんからですが、先代、つまり三代目さん程の名人と呼ばれる人は空前であり、絶後ではなからうかと言われていますが、さぞかし、名人獨特の氣風がいろ／＼おありだつたでしょうね」

「何しろ、一つの事をやるにしても徹底的に研究してやりました。例えば竿一つ作るにも先づ参考文献を集めて、はじめました。竿屋さんに聞いても、仲々秘傳として教えないのですね。材料を撰ふには、全國各縣廳の農桑課といえますか、しかるべき係に紹介狀を出し見本を取り、適當したのがあれば、直接行

つて貨車一台買取つてくるんです。家中竹ばかりで、竹屋さんみたいでしたよ。そうして一年ばかりすると、もう竿の權威になつて、ラジオ放送するし、あべこべに竿屋さんを集めて白木屋で講習會を開くという有様でした」

「歌舞伎の世界は随分傳統と保守の面が強いと思われのですが……」

「父は何でも徹底してやり、研究して新しい方法で合理的にどん／＼進めて行くといつたやり方で、しかも其を支えているものは傳統の職人氣質ですね」

「氣むずかしい點も相當あつたでしょうね」

「今申上げたようなやり方ですから、何でも専門家以上になる、何をやらせてもうちの職人に敵うものがない、ごまかしと中途半端が嫌いです。これは一つの例ですが、ある芝居で獅子頭を使うことになつた。所があれば郷土藝術で、ひなびたつくりを持つてくるべきなのです。所が、ふつうの職人では、きれいな細工を好む。それで或時職人がそれをやつてしまつた。すると丁度ストープにあたつていた父は、なたを持つてこさせて見る前で割つて、くべてしまつた。大へん慘酷のようですが、父は云うのですね。職人がかけた幾日

かの職手間は、おれが金を拂つているので損をするのはおれだ、そういうことをして、職人を教育するんだと云う」

「修禪寺物語を聞くようですね」

## 六代目と親交

「一ばん仲の良かった俳優はどなたですか」  
「それは六代目菊五郎です。特に釣と釣竿とが、その仲立ちをしたのでせう。

ちよい／＼一しよに釣に出かけたようです。中でも昭和十七年頃だつたと思いますが師走の千秋樂の翌日、佐原の水郷での釣は印象的だつたと見えてよく話をしておりました。六代目は奥さん、男衆、小道具係、女中あんまさん等十二人で乗込んでこられた、場所ころは石納、一面の水郷を背景にしての釣は、鈴木泉三の「生きてゐる小平次」を想い出したのです。父はいつも芝居と結付けて考へていたのですね。其舞台は六代目が多九郎、勘彌が小平次は、千賀沼水郷の背景、一面の布波が小波を立ててゐるといつた案配です、その時の名台詞、調子そっくりだと云つていました。もやうと、藍染の鶉革の二つ折りの蓑入れを出して、「與つちやん（與兵衛氏のこ）と、ここでは、これでなくつちや駄目だよ」

と云い「あゝいい景色だな」というのは、全く舞台そのまゝで、名優の舞台というものが根もない作りごとでなく地についたものだと感心してゐたようです」

「釣といへば、昨年『浄土』へも原稿を頂いたのですが、『浄土』に殺生の釣は、おかしいだろうと、自分でもおつしやつてそのまゝになつていますが」

「今ここに遺稿としてこの秋出す予定です」  
「こうなりますと、釣も一つの藝術ですね」  
「六代目とは、よく話が合つて、ある時などは、樂屋へ行つて話こんでいたのですが、丁度鏡獅子の腰元の出で、釣台で化粧をしていた所が、話はずみ、六代目は『大物がでるかい』『それからどうした』等と話し、幕の知らせが二三度あつてやつと出たのですが此間十數分」

「舞台では面喰つていたでしょうやはり名人と名優の心境相通じるものがあるのですね」  
「六代目は道具を大切にされ、舞台で使つた舞扇、大小刀の柄に白粉のあとがついていた事がなかつたなど、感心しておりました」

當主は東大を出られて間もないが、跡を繼いで一家協力して此道をもりたてていこうという氣宇が話の端々に見られる。(R)

## 讀者のページ

○前略御慰問を辱ふし私や田端氏留守にて失禮しました。私達にも明るい日が近づくのを待ちつつ、日々感謝の日を過しております故、御安心願います。毎度「浄土」澤山御恵送下さいまして一同感謝し熟讀致し居ります。今夕マヌスの友が歸つて來ます、皆様の御力と感謝し居ります。御禮まで 合掌（スガモブリズン 山田隆元）

○八月號「浄土」を拜讀させて頂いてとても有難く喜ばせて頂きました。誠に御手数恐れ入りますが六月號の老の聖訓と一枚起請文も是非拜讀させて頂けないでせうか、信徒必携壹冊及一枚起請文の書も（東京・中里 藤澤ゑい）

○毎號嬉しく拜見、小生元氣、又ぞろ新校舎建設、教化のお役に立てばと努力中、九月廿六日生徒と上京、鑽仰會の皆さんと會ふ日を待望しております。（兵庫・黒井町 赤尾敏弘）

大小不拘、おたより、ニュースをお送り下さい。（編集部、讀者のページ係）

## 芝園だより

○自秋の好季とはいえ、残暑まだきびしい昨今、御氣嫌いか。永い苦しい夏をすごし得て、再びめぐる燈下の候、益々浄土の御愛顧をまます願ひします。

○待望の朝鮮休戦も何だかもやもやして秋明の空とは行かない。人生すべて何事も仲々に割り切れるものではない。口でこそあれこれといつても、決断はむづかしい。浄土の飛躍も、よくいわれることだが同断である。それにしても、向上の道を辿っている事は事實。

○小粒ながら、ビリッとしたものをと、残暑にうだる心で、考えあぐんでいゝわけである。（竹中）

○何時の間にか立秋。マヌスから歸つて來る。嬉しい事です。しかし今年には米は平年作を下廻るかも知れないとか。奄美大島を返還してくれるらしいが、日本もこれから大變なことでせう。

○青森の成田光穂氏、頭クリクリ頭陀袋、わらじ姿宜しく、ヒョッコリ大正に。二十五靈場廻りをし

て來たと。曰く「坊さんは、こんな姿で、是非一度行脚すべきだね」。机上の空論でも、怪氣炎でもないこの言葉に、耳をかたむけた

い。

○夏期講習で、宗務の八百谷先生や船造氏大正で汗だくの活躍。浄土の先生方も、講壇で汗だく。地方から出て居る聴講生の人々も汗だく。夏安居の様な修行です。

○毎日新聞に竹中先生が書かれたのは大變好評。讀者の方はいかゞでした。

○「婦人と信仰」と言ふ特輯までには行きませんでした。三枝樹先生のお話と、寺森教山尼の苦心談は、特に御願ひしたものです。尼衆學校は婦人雜誌に盛んに取りあげられ、世の注目をあびています。さきを越されていきますが浄土でも是非一度訪問してみたいと思

つています。（安居）

○今年の教學大會は宗務所で十月廿四、廿五兩日に開催され、全國學者教化者の參集を期待される。

○本誌編集も愈々多面な會員諸氏の要望に應へ、本月より保育關係の記事を載せていくべく、本宗保育連盟の古屋氏を訪問し、協議しうる所があつた。

○宗内には種々理想を掲げてグループがあるが、東京在住の少壯有爲——サーティエイジャという所か——の集まりに一洗會がある。今

まで諸種の出版、研究會の事業其他の活躍を見たが、今後、旬刊程度新聞活動に乗り出すとか。發展を待つ。

○教學院研究所では、八月二十九日、宗務所で小島章見氏の「縁山經藏と藏司」についての發表があり盛會であつた。

○來月號より賢順先生の一紙小消息を連載します。（龍海）

誌代 會費半ヶ年二百圓、一年四百圓（共）。毎號定價三十圓千四圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「浄土」 九月號

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

昭和廿八年八月廿五日印刷  
昭和廿八年九月一日發行

（定價三十圓）

編輯兼 眞野正順  
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

東京都千代田區神田保町三ノ十  
電話 芝（四三）一三二八

東京高等保育學校  
聖美幼稚園

内山 憲尚 著

## 幼児の生活と創造の保育

定價二八〇圓 A判 二四五頁

◇幼児を取り扱う人は先ず幼児の生活を知らなければならぬ。本書は幼児指導の實際に三十年來努力を續けて來られた著者が實踐的立場から、幼児の生活、幼児の心理を平易明快に説かれた良書  
◇幼児の創造力を伸ばすと共に、保育者に對する、創造保育、民族保育の眞諦を明らかにされた保育者必讀の書

發行所

横濱市磯子區原町四

日本保育教材株式會社

## F・F・D 幻燈機

○映寫機（ふつう映寫機と同じ性能）

ミナシキ……一二八八〇圓 送五〇〇圓

マスター……一三五〇〇圓 送五〇〇圓

○スライド（フィルム）

各卷三、四〇〇圓程度、數百種カタログ進呈、

○本會代理責任取次

## 淨土トラクト

淨土編集部編

信徒必携

信徒としてぜひ之だけは知つておきたい「淨土」のみおしえ・みほとけのこと・お念佛・信徒のつとめ・其他・佛壇・香・珠數・木魚・おけき・佛式作法一通りを丁寧に説明したもの、

藤井實應著

一枚起請文（再版）

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い體驗によつて、かんでくだいて説かれた念佛信仰者必見の書

## 淨土シリーズ

文庫版四頁二圓 百以上一、八圓  
送、五百以上每八圓

大野法道著

五重の<sup>じゅう</sup>話

本宗入門の式である大切な五重とは何か、何を傳え、どんな<sup>い</sup>みがあるのか。大野博士が特に平易に解説されたもの。五重宣傳のチラシ、又は、授講者施本として大へんよろこばれています。

B六、十六頁 價十圓送八圓  
五十部以上二割引  
百部以上八割引

會仰鑽上人然法